

「教会を造り上げるために」

2023年2月12日

コリントの信徒への手紙一 14：1～19

今朝の学びは、見出しにもあるように異言と預言です。私は、異言は聞いたことがないのでどのようなものなのかわからないのですが、ある学者によると、ペンテコステの時に聖霊降臨が起こったことが記されています。使徒言行録です。その2章の3節4節にこのように書かれています。「そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した」とあります。ここが異言ではないかという先生もおります。周りのユダヤ人たちは何を話しているのかわからないけども、外国から来たユダヤ人たちはわかるのです。彼らは離散したユダヤ人であり、イスラエルを離れて外国で暮らしそこで結婚して子供も成長したのです。その子供たちはもはやヘブル語は知らず、その土着化した言語を話すのです。それで自分の故郷の言葉で使徒たちが話していることが分かるのです。例えば、ユダヤ人が日本に来て住みつき子供が日本で暮らしたとします。母国イスラエルで五旬祭があるので家族で帰省したとします。その時、使徒たちが霊に満たされ日本語で話したとします。「神さまは愛の方です。イエスさまは救い主です。」とその話を聞いて良く分かるのです。これが異言ではないのか、とある学者は言っています。

コリントの教会はその当時、異言する人が現れ、パウロは14章でかなり多くの紙面を割いて説明しています。ところで異言は異邦人も語るのです。エルサレムの北の方角にカイサリアという都市がありますが、ペトロが説教している時、一同に聖霊が降り異邦人が異言を話して神を賛美したのです(使徒言10:44~46)。エフェソでもありました。「パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が降り、その人たちは異言を話したり、預言をしたりした。この人たちは皆で12人ほどであった」(使徒言19:6)とあります。ですがパウロは異言を語るよりも預言しなさいと教えています。なぜなら、4節「異言を語る者が自分を造り上げるのに対して、預言する者は教会を造り上げる」からです。預言は今で言うと神さまのみ言葉を語る説教であり奨励です。ですから、教会を造り上げるには預言が勝っていると教えるのです。パウロはそのことを楽器を例にしてわかりやすく語ります。7節のところですが、「笛であれ豎琴であれ、命のない楽器も、もしその音に変化がなければ、何を吹き、何を弾いているのか、どうしてわかるでしょう」と言います。昔小学生の頃、音楽の時間でリコーダーの授業がありました。家で課題曲を一生懸命練習しました。最初は音が良く出せなかったので何の曲か周りでわからなかったと思います。段々練習していくうちに音階もはっきり吹ける様になりました。母は言いました「何の曲かわかるようになった」そのように音に変化しなければ何を吹いているのかわからないのです。リコーダーで思い出したのですが、前任者の太田光夫先生はリコーダーの先生でもありました。前、埼玉地区の教師委員をしていた時、1区的最寄り教師会で太田先生をお呼びしてミニコンサートを開かせていただいたのでした。先生は幾つかの珍しいリコーダーを持って来てくださり、吹いていただきました。とて

も高価そうなものでした。でもあの時お元気が無く、他の先生もちょっとおかしいと感じていたのです。その後しばらくして急に亡くなられました。私は白岡にいたのですが訃報が届いて驚きました。初めは信じられなかったです。体調が大分悪かったのではないのでしょうか。温厚な先生だったと思います。本当に残念なことでした。

異言も自分だけ恍惚状態になって話しても周りの人にはわからないのです。ではどうしたらいいのでしょうか。15節ご覧ください。「霊で祈り、理性でも祈るようにしましょう。霊で賛美し、理性でも賛美することにしましょう。」と言います。人間には神から与えられた理性があるのだから、霊で祈り、理性で賛美することが大事であると言います。理性が働くと知恵が現れるのです。霊でも祈り理性でも祈るようにすれば、その人が理性も成長し、周りで聞いている人に主イエスの福音が告げ知らされる、とパウロは語ります。そうでなければ教会に来て、まだ間もない人々が異言を聞いた時何を話しているのかわからず、伝道にならないのでは教会を造り上げることが出来ないのです。この異言という言葉は、フランシスコ訳では「不思議な言葉」と訳しています。別な訳ではストレンジタング奇妙な舌、或いは良く知られていない舌で話す人、とも訳されます。初代教会では礼拝中に突然霊を受けて、本人もおそらくわからない言葉で神に向かって話す人がいたのです。その流れが初代教会を通して伝わり受け継がれて19世紀の終わりから20世紀の初めにかけてアメリカではペンテコステの賜物を求める分派が現れました。これが日本にも伝わったペンテコステ派の起こりだと言われています。礼拝中ハレルヤ、ハレルヤと言って賛美します。その派は信仰による義認とは別に聖化されることを願いました。信仰によってきよめられることを願ったのです。そして、近い将来キリストの来臨があると説きます。それで、異言を語ることは救いの確かさを示すものだと考えたのです。このペンテコステ派について、少し深読みしますと、いつの時代にも聖霊の働きをことさら強調する信仰がありました。このペンテコステ派は初代教会に弟子たちが集まって祈った時に聖霊が降って異言を語ったように、そのしるしが自分たちにも与えられることを願ったのです。その派は聖書の根本・原理・奇跡をそのまま信じ、神の癒し・イエスさまの癒しを信じました。洗礼・バプテスマと聖餐の他に洗足・足を洗うこと、それはイエスさまに真似て互いに足を洗うことを礼拝の中で儀式として行うのです。系列として、アッセンブリー教団、チャーチ・オブ・ゴッド教団、真イエス教会、サンビ教会、イエス之御霊教会がそうです。しかし、教派が違おうと戸惑うことが多いのです。皆主イエスを信じているのだから同じだと思いがやすいですが、日本基督教団は会議制ですが、聖霊を重んじる派は会議をしないで力のある人・賜物が沢山ある人が指導者になって牧会する教会もあるのです。牧師は要らず、いても無報酬であり信徒が自主的に奉仕するのです。これからはルターやカルバンのようなカチツとした信条主義の教会よりもペンテコステ派のような霊を重んじる自由な気風の教会が増えるという先生もおります。しかし、そのような派は賜物を競いました。前、学んだ12章のところ、4節にこのようにあります。「賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です」と語ります。「私の方がいい賜物だわ」と誇ってはいけません。互いに競い合った時、心が分か

れます。ペンテコステ派はかつて、分裂や合同が繰り返されました。枝分かれしてアッセンブリー教団やチャーチ・オブ・ゴッド教団他が出来たのです。

以前、教師研修会が行われたのですが、テーマは「癒しの教会形成」でした。副題は「スピリチュアリティと牧会」でした。講師は聖学院大学の窪寺俊之先生でした。それではスピリチュアリティとは何か、というと先ほどお話した霊性、魂という意味なのです。現代は新聞等にあるように、スピリチュアリティが喪失した時代であり、その反動として逆にスピリチュアリティを求める時代になってきているのだそうです。それをわかりやすく言うところです。秋になると田んぼの稲の穂が実って穂先が垂れてきます。ただ重力がかかるから垂れた現象だけども、それを人間が見るとそこに感性が働きます。「お米は偉いなー、あんなに実っても偉ぶらないでかえって頭を下げている」 そのような見方がスピリチュアリティなのだそうです。元来、日本人はそう感じる事が、その人の徳なのだと言われってきました。テレビで腰の曲がった100歳のお年寄りが、まだ若いアナウンサーに「お世話様です」と頭を下げていました。それを見て偉いなーと感じる心がスピリチュアリティなのだということでした。そのスピリチュアリティはどの宗教にもあり、人間に与えられている精神なのです。ところが現代はその心が失われてきていると言います。聖書には霊性が語られています。パウロの書簡にも霊が強調されています。先週学んだ愛の賛歌は愛の心スピリチュアリティに満ちています。13章の5節「礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない」とあります。18節に「わたしは、あなたがたのたれよりも多くの異言を語れることを、神に感謝します」とパウロは言っています。これはどのようなことでしょうか。パウロはそんなに異言を語ったのでしょうか。使徒言行録を読んでもそのようなことは書かれていないのです。でももしかしたら使徒言行録を書いたルカが省いたかもしれません。けれど、19節を読むとこのようにあります。「しかし、わたしは他の人たちをも教えるために、教会では異言で一万の言葉を語るより、理性によって五つの言葉を語る方をとります」と語ります。パウロ自身は異言を語れないのではなく語れるけれども、教会では異言よりも預言で語ることを望んだのです。コリントの教会の人々は異言を尊んだのでしょうか。けれども、異言は神との交わりをする時の個人的な宗教的経験です。なので、パウロは教会では預言を尊んだのです。異言を話しても始めてきた人は恐れを感じて帰ってしまうかもしれない。そうなる教会のスピリチュアリティ・徳が立てられない、と考えたのです。ですからわからない言葉を一万語るより、人に良く分かる言葉を五つ語った方が伝道になると思ったのです。そのことが23節24節25節に書かれています。「教会全体が一緒に集まり、皆が異言を語っているところへ、教会に来て間もない人か信者でない人が入ってきたら、あなたがたのことを気が変だとは言わないでしょうか。反対に、皆が預言しているところへ、信者でない人か、教会に来て間もない人が入って来たら、彼は皆から非を悟らされ、皆から罪を指摘され、心の内に隠していたことが明るみに出され、結局、ひれ伏して神を礼拝し、『まことに、神はあなたがたの内におられます』と皆の前で言い表すことになるでしょう」と語っています。神の言葉が教会においてははっきり宣べ伝えられ、ここ

に神がいますという強烈な印象を人々の心に与えられないなら、信じる人は起こされない、とパウロは結んでいます。パウロの言葉は私たちにも語られているのです。2000年前に語られた言葉が今も通用するのです。

コリントの町はパウロの時代はローマの統治下にあったのですが、その後、コリントの教会は成長し教勢は伸びていったようです。紀元後1世紀ごろには4つの教会が成立しています。その後、ギリシャ戦争がありギリシャ王国が成立したのです。教会が伝道したので、宗教はギリシャ正教会が国教となっています。イタリアより東にあるので東方正教会とも呼ばれ黒い祭服を着て髭を蓄えています。でも使徒たちの伝道で国の国教にまで発展するのは聖霊の働きでしょうか。日本の伝道が伸びないのは、日本は昔から神道や仏教が根を張っていて、伝道の根はなかなか根付かないのだと思います。

教会を造り上げるため、私たちは様々な意見を言い、教会にとってプラスになることを目指し、探っています。そのために、霊で祈り、理性でも祈って、神さまのみ心に適うよう歩みたいと思います。